

# 学園祭 しだれ桜 親しまれ

## 教育

2015

群大「工学部100年」

4



この100年間、様々な人たちが往来した群馬大学の桐生キャンパス。学生、院生、教授陣、事務職員ら大学関係者だけでなく、地域の住民にとっても、そこ

は「集いの場」であり続けてきた。

「群大工学部は家の庭同然でした」。徒歩で1分かかる近所に住む田部井勝稲さん(72)は、にこやかに回想した。大学近くの雑貨屋で生まれ育ち、県立桐生高校から群大工学部機械工学科に進んだ。学部卒業後も大学院で「極超音速飛行物体の周辺に発生する衝撃波の構造」を研究し、50代後半には教授として教壇

に立った。2008年に退職し、今は和算の研究に取り組んでいる。

実家の雑貨屋には、学生たちが高げたをカラコンと鳴らして面白い物に来た。3年に1度開かれた「工学祭」では、実験室に漂う薬品のおいにくくわくし、鉄の塊にしか見えな

## 次の100年へ 歩み続ける

「寮祭」で案内された学生の部屋は「万年床の脇に本やレコードが積み重なり、お化け屋敷のようでした」。

向学心を刺激され、頼もしくて優しい学生たちに憧れた。「あそこで勉強してみたい」と魅せられ、自然に人生の大半を群大工学部で過ごすことになった。

「おかげさまで、生まれてこのかた桐生を出たことがないんですよ」

そんな集いの場としてのシンボリックな存在が、キャンパス中央にあるしだれ桜だ。群大工学部の前身、桐生高等工業学校の応用化学科を卒業した丸田芳郎・元花王社長から申し出があり、1977年に池や図書館周辺の桜とともに花王財団から寄贈された。桐生市のホームページにも桜の名所として紹介され、毎年4月に構内を華やかに彩る。

その桜の樹勢が衰え始め、大学側は周辺を柵で囲うなど保護に乗り出した。大学側が樹木医の資格を持つ前橋市出身の塩原貴浩さん(39)に診断を依頼すると、「樹勢が衰退」と結果が出た。2009年のことだ。不適切な部分がせんでいされ、周辺の樹木に養分を奪われているおそれもあった。せんでい部分からの菌の侵入による腐朽も懸念された。周囲の土が踏み固められ、根への通気や透水が不十分になり、養分も行き渡らなくなっていた。

寄贈時の植樹は京都の「桜守」と称される16代目佐野藤右衛門さんが営む

天然・三陸産

山王水

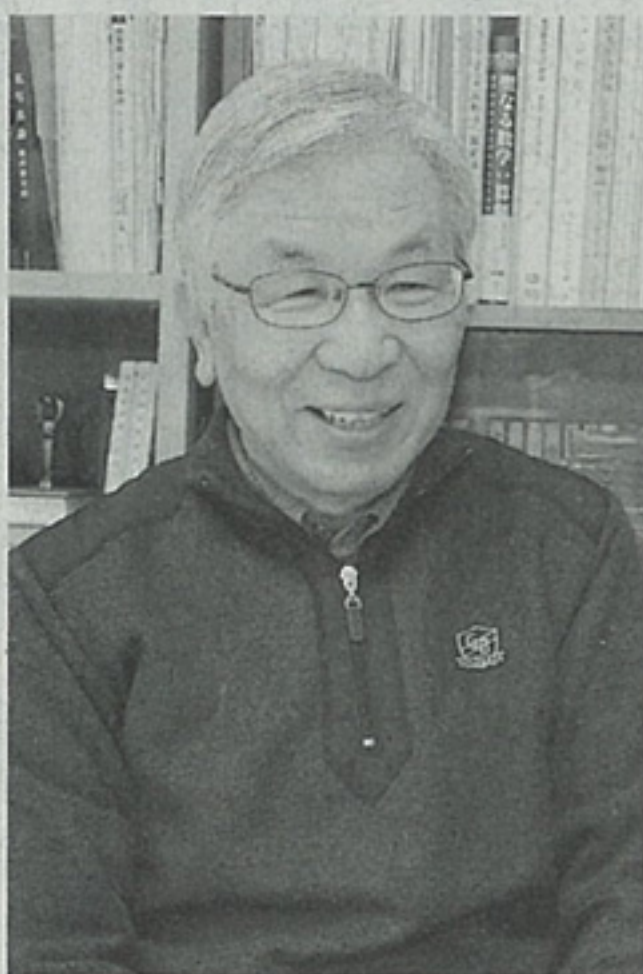
祝・法

美味しさと健康

「植藤造園」が担当した。塩原さんは東京農大大学院を卒業後、同社で5年間修業した縁で、今も診断を続ける。「桜は話せないし動けない。だれかが『守り』としてずっと様子を見てあげなければ。目をかけて手をかけて、年月をかけてはぐくむ。人間の教育と同じなんです」

今はまだ枝だけのしだれ桜の前で篠塚和夫・理工学部長は「先輩から贈られた貴重な桜。大学とともに、次の100年に向けて咲き続けてほしい」と語った。

(馬場由美子) 〓おわり



田部井勝稲さん



塩原貴浩さん

キャンパスで毎年見事な花を咲かせるしだれ桜。中央は国登録有形文化財で1916年築の同窓記念会館。群馬大学理工学部提供